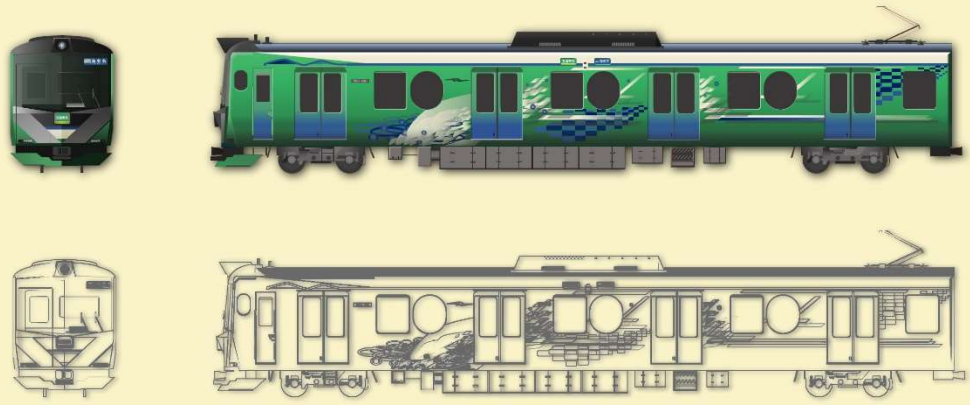
新型電車、1050 系デビュー！



2022 年度に予定されている相鉄線と東急線の直通運転開始、それに伴う都営三田線を介した奥武中山道線/奥武本線から相鉄線までの直通列車運転を考慮し、奥武鉄道では 2019 年 9 月より新型電車、1050 系をデビューさせます！車体デザインは多数の会社線の車両が入り乱れることになる東急線、相鉄線の中にあって奥武線の個性を発揮し、神奈川県内のお客様にも奥武線沿線の魅力をアピールすることを目的として河本謙三インダストリアルデザイン事務所によってなされました. 直通開始の際には 8 連での運用を予定しておりますが、まずは 6 連で都営三田線直通列車による運用に投入されます.

2019 年 9 月 7 日　奥武鉄道

編成：8 両編成(暫定的に 6 両編成)
軌間：1067mm
電軌方式: 直流 1500V(架空電車線方式)
最高運転速度: 奥武線内 120km/h
三田線内 120km/h(急行線), 80km/h(緩行線)
東急線内 110km/h
設計最高速度: 130km/h
起動加速度: 3.5km/h/s
減速度(常用): 4.0km/h/s
減速度(非常): 6.0km/h/s

全長: 先頭車 20250mm
中間車 20000mm
全高: 4050mm パンタ付車両 4125mm
車体: アルミニウム合金

埼玉の誇りを乗せて走る旧くて新しい奥武電車

1050 系電車のコンセプトは「神奈川のお客様を埼玉、奥武線沿線に引き込む電車」. 現在の浦和、さいたま市エリアは今でこそ「海なし県の県庁所在地」であるが、ここにはかつて大宮台地(北足立台地)を取り囲むように奥東京湾が広がり、中世、近世にあっても低湿地が広く広がって中山道浦和宿ではうなぎの蒲焼が振舞われるなど、台地上の町を取り囲む湿地と不可分の文化を育んだ. 「浦和」という地名に海を連想させる「浦」が入っているのもその名残、また奥東京湾の跡に残された見沼の水神様を祭ったのが武蔵國一宮とも称される大宮氷川神社の始まりという…. 奥東京湾の湿地はまた水鳥の生息地でもあり、1970 年代までサギの生息地であった「野田のさぎ山」にその豊かな自然の記憶を刻む.

神奈川と埼玉を結び、東急、相鉄線内での奥武線の新たな顔となる 1050 系電車. 奥武鉄道通勤形電車伝統のエメラルドグリーンを光沢感の強いメタリック塗装で大胆に使い、そこに淡く優しい「URAWA BLUE」と深い「MINUMA NAVYBLUE」で水辺の波紋を現した. 水辺から飛び立つ鳥の羽はいずれ方形の幾何学模様となって埼玉の街を現し、青の濃淡とともに新たなステップを形作る.

魅せたいのは水辺から飛び立つ奥武沿線の街の誇り. 青を多用した車体カラーリングは併せて都営三田線直通列車であることも感じさせる. 前面デザインは流行の黒丸坊主スタイルを取り入れつつも、曲線より直線を強調した多面体構成として鼻筋の通った力強さの中に奥武線の新たな通勤車スタンダードを目指した. 前面下部の斜めステンレス補強帯は通勤形電車としては 1982 年デビューの 6000 系以来 37 年ぶりに奥武鉄道伝統のスタイルを取り入れ、運転台スペースを確保するために貫通扉をオフセットしたことで前面中心で折れるかつての湘南顔にも似た、それでいてさらにシャープで彫りの深い顔を作り出した. 1050 系電車に乗って、新たな奥武を体感して欲しい.

インダストリアルデザイナー　　河本　謙三